野木小学校同窓会報

第11号
平成9年12月
野木小学校同窓会編集部

ご挨拶

第37回卒
同窓会長　田中栄一

わが野木の里にも黄金波打つ稔りの秋を迎えました。

会員の皆々様にはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

今年も同窓会の会報として、第十一号を発行させて頂きます。わが同窓会は五年目毎に同窓会誌（会員名簿掲載）を発行して居ります。創刊号は昭和五十九年に、第二号は平成元年に、第三号は平成六年に発行して居ります。この間、四年間は会報を発行し、会員の便り、思い出、学校の現況等掲載して、会員同士のきずなを深めるよう努めて居ります。発行毎に内容も充実し、皆さんに喜んでいただいて居りますことは、会員の皆様よりのご投稿のお陰です。茲に厚く御礼申し上げます。特に今回は編集に当り、本会役員始め編集委員のご尽力により、各卒業年代毎に選んで頂きました。ご投稿をお願いしました方にご協力を頂き、ここに厚く御礼申し上げます。

さて、本会の顧問でありました、野木小学校西川校長先生が、去る六月二十三日、突然の赴報に接し、驚きと共に、今尚信じ難い思いであります。西川校長先生は、温厚篤実なお人柄で、学校教育は特に熱心で、子供達の指導にあたりある目標を定めて行われ、平成八年は子供みんなが一輪車に乗れるようにしよう、平成九年は鉄棒でサカアガリが出来る子供を多くしたいと、同窓会理事会で熱心にお話をされて鉄棒の新調を要望されました。会として充分ご協議して頂き、特別会計から鉄棒を寄贈させて頂きました。子供達に力をつけてやろうとの心の深さに感動したのは私一人ではないと思います。又、同窓会の運営につきまして特段の御指導を賜りました事に対し感謝申し上げますと共に心から御冥福をお祈りいたします。

ご挨拶

学校長　岩本守博

同窓会員の皆様には益々ご健勝にてご精励のこととお慶び申し上げます。

さて、すでにご承知の方も多数おられると思いますが、平成九年六月二十三日に、前西川校長先生が急性心筋梗塞のため急逝されました。あまりにも急な赴報に、関係機関はじめ町内外の旧知の方々にいたるまで大変な驚きと深い悲しみに包まれました。今ここに、会員の皆様と共に、改めて心よりご冥福をお祈りいたしたいと存じます。

後任人事としまして、不肖私が校長職を受け継がせていただくことになりました。教頭職には、新採用として熊川小学校より古田貞明先生に御着任いただきました。新教頭と共に誠心誠意努力させていただく所存でございますが、両名とも若輩者ゆえご迷惑をおかけすることが多々あろうかと思います。何卒ご容赦賜り、本校の更なる発展のためにご理解とご協力賜りたく衷心よりお願い申し上げる次第でございます。

日本は今や教育改革の最中にあります。二十一世紀を目前に控えた今、社会はまさしく激しい変化を続けておりますが、そのような社会に主体的に意欲を持って対応し、生涯を通して健康で心豊かな生活をすることが出来るようにするにはどのような力が必要なのか、といった観点に立って学校教育が見直されてきています。日本は、今日なお国際社会の場で、特に経済的に高いポジションに位置していますが、そのような視点からも学校教育に大きな影響を及ぼしているように思われます。

いずれにしましても、学校教育は家庭や地域と切り離して考えることは出来ません。家庭生活や地域社会を背負って子どもたちは成長し、それを基盤にして学校社会が成り立っています。学校が真にその教育力を発揮できるのは、教員の資質を向上させることはもちろんのことながら、それと合わせて、家庭や地域の深いご理解とご協力がいただけたときであろうと思います。

今年度当初の理事会（兼総会）の席上で、老朽化した外の鉄棒を新しいものにしていただきたい旨のお願いを申し上げ、ご承認をいただきました。前西川校長先生のたってのご希望でステンレス製の上等のものを購入していただきました。

それを、亡くなられる直前の育友会の奉仕作業で、作業時間を大幅に延長して設置していただきました。今では児童も安心して鉄棒に取り組んでいます。本当にありがとうございました。大変遅くなりましたが、同窓会会員の皆様に衷心より厚くお礼申し上げます。

いま、本校の児童は元気で素直な子供たちばかりであります。ご家庭や地域の皆様方のご支援の賜と心から感謝いたしております。何卒、今後も変わらぬご指導とご鞭撻を賜りますようお願いいたしまして、言葉足りませんが挨拶に代えさせていただきます。

21世紀に向けたふるさとづくり

第36回卒
町議会議員　奥本周之介

今回野木同窓会誌十一号が発刊される機会を得まして、議会報告を兼ね、上中町の取り組み等について触れてみたいと思います。

二十一世紀に向って交通対策では、嶺南地域の高速道路整備計画に、昨年の十二月小浜市岡津より敦賀までの全線が組み込まれ長年の悲願に一歩近づいたと思っております。今後は、「施行命令」が一日も早く下されるよう、強力に運動を展開している所であります。又嶺南鉄道整備計画には、琵琶湖若狭リゾートライン新線と小浜線電化及敦賀からの直流化事業を強力に推進し確かなものとするため、小浜線電化については、平成九年度から鉄道整備基金を創設することで合意がなされた。一日も早く実現に向かって強力に運動を展開している所であります。

次に町の重要プロジェクトの一つであります県営河内川ダム建設事業推進について、着手以来十五年を迎え、本体の本格的工事を、福井県と連携をとり乍ら関係する事業とも、積極的に進め災害に強い町づくりに早期完成を目指して全力を挙げて推進しています。又若狭中核工業団地では、経済が低迷しておりましたが、やっと明るい兆しが見え始め若狭テクノバレーも五社操業し、五百余名の方が勤務され、あとの三企業も近々の内に操業される事になりました。続いて宅地分譲地推進では、分譲率五〇パーセントの状況であります。

老人福祉政策においては、今年十月三日よりディサービスセンターがオープンし、保健医療福祉一本化した施設、運営を開始する事ができました。

次に一般廃棄物最終処分場も下タ中地係に今年十月に完成十一月に稼働する事になりました。生活環境整備事業の下水道事業の整備では野木地区鳥羽地区瓜生地区では完成したが熊川地区三宅地区では平成十一年四月には完成する予定であります。

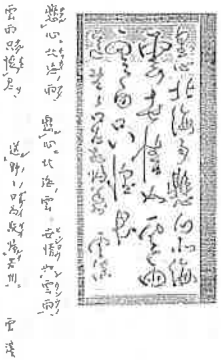
高齢者の皆様方の要望のゲートボール場も中核工事団地内に今年十月よりオープンすることが出来ました。

この様に次々と計画されます今日、野木の里にも公害のない豊かな町に発展するよう望み、皆様のご多幸をお祈り申し上げます。

旧職員からの便り

感銘を受けたこと

熊川　槇本實子



私が野木小学校に勤務していた時、二つのことに感銘を覚えたことを思い出す。

一つは、野々口為敬師と小森甲子良師の二人のことであり、もう一つは、野木小学校の校章についてである。

さて、野々口為敬（敬省略）は、元若狭藩の典医の生れであったが、梅田雲浜と共に勤王の志士として活躍。

風雲急を告げ、雲浜が我身の危険を感じた時、後輩の為敬を自分と同罪にするのを恐れ、彼を諭して郷里の小浜へ帰したと言われる。

雲浜は別れに際して為敬に送ったのが、冒頭の誌である。

雲浜の切々たる想いが述べられている。

野々口為敬は、小浜へは帰らず、彼の妻が旧宮川村新保の出身であったので、その縁か玉置区に居住したのである。

為敬は、幕末玉置の玉泉寺において、医業のかたわら旧野木村各集落の子弟を集めて寺小屋を開き、教育を授けている。明治五年に児童生徒数三〇名から成る恵懐小学校が設置された。

為敬は、明治十一年に五十四才で没しているが、現在も玉置区の墓地に敬道玄徹居士の墓石が残されている。

為敬は、先輩の梅田雲浜の如く勤王の志を全うし得なかったが、彼の秘めた思いは、寺小屋の子弟の教育に注ぎ込まれたと考える。

後年、前知事中川平太夫氏のような傑出した人物が輩出したのも、そうした土壌が培

われていたと思われる。

恵懐公園の中川平太夫前知事書『深謀遠慮一気呵成』の石碑は、明治維新の進取の気に富んだ志士の如き思いが述べられているように私は感じる。

次に、小森甲子良師は明治三年に京都に生れ、家業の医師を継いで防疫医として活躍。

特に、彼の祖父は長崎において蘭法医シーボルトより「種痘」を修得し普及させたと言われている。

小森医師は、縁あって大正三年に無医村であった野木村堤区に居住され、野木をはじめ近辺の村の村医や校医を勤め、医は仁術なりと診察料や薬代は気にかけられず、清貧の生活に甘んじておられたという。

又、小森甲子良医師は医業のかたわら野木村の青少年に学問や俳句、知恩報徳の精神を教えられ、青少年育成や社会教育に尽力された。

そして、昭和二十一年に七十八才で没しておられるが、村の有志の人々はその遺徳を慕い句碑を建て、年忌には必ず句会を開いて亡き先生を偲ばれたという。

以上の野々口為敬先生と小森甲子良先生は、医師として村人に仁を施すと共に、偉大な教育者であり、指導者であったと拝察する。

二つ目の野木小学校の校章は、外形は八咫の鏡形になっている。これは野木地区の八つの集落を指しており、その一つ一つが固く結ばれている。

元来、野木村は細長い地形で、上と下の集落では遠く離れていて意志疎通になったり、利害が一致しないなど問題があったと思われる。

そうした事情に対して、野木村は一つであるのだ、団結すべきなのだと呼びかけているのが、この八咫の鏡形であり、又、野木村住民の熱い思いであったろうと考える。

次に、校章の中央には，野木，の文字を刻んだ旭日が配されているが、この旭日は光り輝いて勢い盛んなることを示し、希望に満ちていることを表現していると言える。

実に、意味深長で素晴しい校章であると、私は感銘した。

私は、平成五、六年度の二年間野木小学校に勤務させて頂いたが、前述の偉大な先覚者に恵まれた野木地区、そして常に団結と希望を児童に語りかけている野木小学校の校章に深甚の敬意を表して筆をおきたい。

子どもに学ぶ

杉谷　みな子

「箱ヶ岳に　青空に　太陽もえ　椙杜神社の社に・・・」

同窓会報の原稿依頼をうけ久し振りに校歌の歌詞を見ていたら、そばにいた娘が、「歌ってみて」と言うので、口ずさんでみました。四年間お世話になった野木小学校での生活が懐しく思い出されます。

保健室で事務をとっていた私は、個人的に、子ども達と接する機会が数多くありました。身体の調子が悪い子、ケガをした子、ちょっぴり悩みを持った子などが、保健室に顔を見せてくれました。子ども達は、遊びのこと、友達のこと、家族のことなど、いろんな話をして教室に帰っていきます。そんな子ども達との会話はとても楽しく、私にエネルギーを与えてくれました。私が子ども達から教わったこともたくさんありました。

楽天的で前進的な子ども達。子どもの心は、本当に純粋です。感動したこと、悲しかったこと、くやしかった事等をストレートにぶつけてきます。子どもが、どんなことを考えて、何をしようとしているのか、また、どんなことをやりたいのか、いつも子どもの心がわかる大人（教師）でありたいと願っていましたが、子どもの心に近づくことは、なかなか難しいものでした。今から思えば、例えば新採用の頃のように、もう少し子どもと同じ目の高さで接すべきだったのではと反省しています。

現在の私は、近所の子ども達とのつきあいしかありませんが、子ども同志で遊ぶ姿、その子ども達の笑顔を見ていると、とても幸せな気分になります。ある本に、「親は子どもを育てているつもりなのにふと気がつくと、その営みの中で自分も育っていた」というようなことが書かれていました。わが家でも、私自身を向上させてくれる娘に感謝しながら日々を過ごしています。そして、まわりの子ども達とのふれあいをも大切にしていきたいと考えています。

野木小学校の子ども達は素直で、いつもキラキラと輝いていました。その基盤となるのは、温かい家庭であり、人情味のある野木地区での日々の生活があるからだと思います。

最後になりましたが、野木小同窓会、会員の皆様の益々のご発展をお祈り申し上げます。

同級生のみんなへ

第76回卒（昭和60年）
武生　清水久貴

同級生の皆さん、元気でお過ごしですか。中には昨日も一緒に遊んでいた人もいるけど、随分長い間会っていない人がほとんどだと思います。又、今回のこの機会でみんなの事を久し振りに思い出せてうれしく思っています。

月並みですが時の流れというものは速いもので、もう二十五歳ですね。僕もそうですが皆さんも人生で一番充実しているんじゃないでしょうか。仕事にがんばってる人や幸せな家庭を持った人、それぞれ大変だろうと思います。僕はというと、高校を出て福岡県で四年間を過ごし、今は上中町住民センターで仕事をさせて頂いています。みんなの中にも仕事柄よく会う人もいるし、お世話になった先生方と久し振りに顔を会わせたりと、懐しいと思う事が多々あります。

先生で思い出しましたが、僕らの学年は、本当に多くの先生に担任して頂きました。特に五年生の途中から担任して頂いた「高橋先生」を覚えていますか？とてもユニークな先生で、よく怒られもしたけどつき会いやすい不思議な感じの先生だったような気がします。その頃は、途中で先生が変わった。ぐらいの事しか思いませんでしたが、今、自分が仕事をするようになってみて大変苦労されたんじゃないかなと思います。元気でがんばっておられるとは思いますが、僕がいつかまたお会いしたい先生の一人です。みんなとも一度集まれるといいんですが、仕事を持つと全員が揃うという事はなかなか難しいのが現実です。僕達町内に残っている者が中心になっていつか出来ればな、と思っていますのでその時はよろしく。

とりとめのない話ばかりでしたが、最後に今回寄稿（寄稿というより同級生への手紙として書いています。）する機会を与えて下さった事務局の皆様に感謝して、筆をおくことにします。

みんな元気でがんばって下さい。

思い出

第76回卒（昭和60年）
山内　飛永美加代
（旧姓竹村）

八月のはじめ一通の封書が実家に届けられました。母から受け取り見てみると〈竹村美加代様　野木小学校〉なつかしい学校名と校章が目に入りました。なんだろうと開けてみるとこの原稿の依頼。私の頭の中には、野木小学校での思い出が消えては浮かび、浮かんでは消え・・・。

楽しかった集団登校。あすなろ農園での収穫。放課後のソフトの練習、暑くても一生懸命でした。大嫌いだった運動会。みんなでランチルームの壁に花の絵を描いたこと。今でもランチルームに行く機会があると『これが私の花』と自慢しています。大好きだった担任の先生の誕生会、みんなで考えた手作りの誕生会でした。プールの裏で小犬を飼っていて先生に見つかり怒られたこと、あの時の先生はとても怖かった。そして小学校生活最大の出来事、授業のボイコット。子供は、子供なりに考えて決行したことでした。十分後、職員室へ謝りに行くことになったのですが。

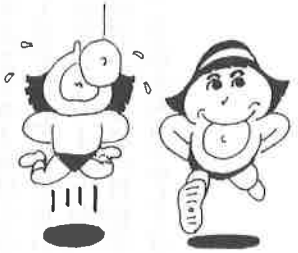
こうして書きだしてみると、不思議と先生に怒られたことをよく覚えているものです。そして、六年間でお世話になった五人の先生一人一人に思い出が重なります。

男の子十八人、女の子五人。後から聞くと『今までにないそおどな学級』と言われていたそうです。その中でも先頭をきって『悪いこと』をしていた私。卒業から十二年余り、そんな私も今では結婚しすっかり主婦。周りの環境はどんどんかわってきています。私の周りだけではなく、今の小学生をとりまく環境もずいぶんかわってしまったのでしょう。考え方も、遊び方もかわってしまったのではないかと思います。ただ、授業中の『勉強』だけではなく、それ以外の『勉強』ができる所。それが小学校であるということは今もかわらない。そう感じています。いろんな経験をし、いろんなことを考え学んでいくということ。そして、たくさんの思い出を作れるということ。これからもずっとそういう場であり続けることを願っています。

もう一つの願い。それは、同じ時をすごした二十二人と顔を合わせ、あの頃の事を話せたらいいなあということ。

みんな元気ですか？

私は元気です。



第68回卒（昭和52年）
小浜市　杉谷正美

同窓会事務局より執筆依頼を受け取った時、小学校時代がとても懐かしく思い出されてきました。小学校を卒業したのはついこの間のようですが、もう二十年も前のことになります。

私の同級生は、男子六人、女子十四人の合計二十人でした。夏には、今のように学校にプールがなかったため、美浜町の久々子海水浴場へ臨海学校に行き、真っ黒に日焼けして水泳や宝探しを楽しんだこと。また、教室でインコや蚕を飼ったり、鶏の卵をふ化させ、ひよこが生まれてとてもうれしかったこと。冬には、雪合戦をしたり、肥料袋をそりの代わりにして遊んだ事等色々と思い出されます。

その中で、私の心の中にずっと残っていることばがあります。それは、私が十歳になった時、先生が「十代は楽しい事がいっぱいあってすぐに過ぎてしまうから、大切に過ごしてね」と言われたことです。その時の私は、十年なんて長い。今まで生きてきたのと同じ時間をどうやって過ごそうかと考えていました。しかし小学校を卒業し、中学校、高校：：と十代はあっという間に過ぎ、二十代も就職、結婚：：と過ぎていきました。三十代をむかえた今、やっと時間の大切さを知り、これからの毎日を大事に過ごしていきたいと思っています。

最後に同級生のみなさんお元気ですか。卒業式の時に十年後（？）に同窓会をしようと約束し実行していませんが、いつか全員が元気で会えるのを楽しみにしています。

第68回卒（昭和52年）
京都市　中田典子

私は、小学生として通った6年間の他に、教育実習生として、約1ヶ月間野木小学校にお世話になりました。受け持ったのは4年生。1・2年生のような幼なさもなく又、5・6年生の様な落ち着きもまだない4年生の子供達の勢いはすごくて、大変刺激的でした。

いたずら盛りで例えば、すまして歩いている私に後ろから走ってきて「かんちょー」なんて毎日の事でした。又、勉強も積極的で、何か暗記した事柄を皆の前で発表するという場面で、ある男の子が、顔をまっ赤にし、目をきーっとつぶって一生懸命暗唱している姿に心を打たれ、子供達を大変いとおしく思ったものでした。そして、かつて自分も同じ教室で同じ様に学んでいる時、担任の先生はこんな気持ちで私達を見ていてくれたのか…と改めて感謝しました。

教育実習も終わりに近づいた頃、クラスで最もやんちゃで、私にも懐いてくれていた男の子が、私を無視するようになりました。何か気に触る事でも言ったかしらと実習生の私はかなり悩みました。そして私の評価をしていただく為に校内の先生方の前で授業をする事になり、それを翌日に控えた放課後、その子は私の所に来て「明日の授業、ぼくはわかっても絶対答えてやらへん。」と言うのです。訳は言ってくれません。当日その子は本当に答えてくれませんでした。そして実習の最終日。私をさけていたその子は、急に赤ちゃんの様に私にあまえてきて休み時間は、なんとずっとおんぶしていました。そして「帰らんとおいて」と泣いたりもしました。そうか…君は私がいなくなるのが淋しかったんだね。

実習が終り西宮に帰ってからも子供達から毎日のように手紙が届き、もちろんあの子もせっせと書いてくれ、それは純粋なかわいいラブレターでした。ところが2ヶ月程たった頃、いつもの様にその子からの手紙を開けると、〝僕は先生よりも、もっと好きな子が見つかりました。○○さんです。○○さんは勉強もできてかわいくて…という事なので、もう先生には手紙を書きません。やわらかい手の感じも忘れてしまいました。さようなら。〟という様な事が書いてあり、私は大笑いしました。今頃ステキな青年になっていることでしょう。

その後、私は企業に勤めました。コンピュータのソフトウェアのメーカーで、私の役割はそれを使うお客様へ使い方を教えるというもので、分野が建築・デザイン向けのものだった為、そちらの方の勉強も私自身大変でした。自分より年上の人ばかりを生徒として、講習をするのですが、その人達が少しずつ出来るようになっていく時の充実感は、教育実習の時と同じでした。

結婚した頃には、建築専門学校の講師をするようになり、19～20才の男子生徒相手に、コンピュータで設計図面を描いたり、建築パースを作成するという授業をしていました。

振り返ってみると、教育実

習生の時、企業に勤めていた時、又専門学校の講師をしていた時、それぞれ生徒や内容は違いますが、私と一緒に勉強してくれた人が、どんどん出来るようになっていく時の充実感はみな同じで、又授業を通じて、人と深くかかわるので、いろいろなドラマもありました。こういう仕事の醍醐味だと思います。又、私は〝先生〟と呼ばれていましたが、私の方が教えられる事、育てられる事も多かったように思います。

現在は勤めを退め、子育てにおわれる毎日ですが、きっと、育てながら私の方が幼い息子に育てられているんだと思っています。

人とかかわる事が大好きなので、近い将来にまた専門学校で働けたら…と思っています。

よき時代

第59回卒（昭和43年）
堤　田中秀明

昭和三十年代後半から四十年代の前半、私は野木小学校生活を送りました。当時はまだ木造の校舎でその姿は今でもしっかり覚えています。

さて、今の子ども達に当時の学校生活を説明するとしたらまず、数年前ヒットした「トトロ」のマンガの情景を思い出してもらい次のとおりに話してあげたいと思います。

「春・夏、石ころ、草だらけの道をまっすぐ歩くと学校、僕らの足音とかえるとせみの声があたりにこだまする。時々、けたたましい耕運機の音が聞こえてくる。

秋、風に揺れている黄金の稲の中にたくさんの稲木が立ち、その上に登るとあたり一面がよく見える。

たまにボンネット型のバス、トラックが通るとみんなで、砂ほこりが舞い上る中追いかける。（まだまだ車の数が少なかった。）

冬、学校まで人の歩くだけの一本道、この道をそれて新雪の上をよく歩く。カチカチに雪が氷った日は、道をそれて田んぼの雪の上をよく歩いて近道。

ミシミシ、ドンドン、どこかで誰かが走ったり、飛んだりすると学校中響きわたる。

冬になると、コークスの臭いが校舎を覆う。みんなが持って来た〝柴〟がストーブの横に置いてある。」等々。

話をしだしたら、きりがなくなると思います。このようにマンガ「トトロ」は、私に小学校生活を想い出させてくれる恰好の物語で、たいへんなつかしかったです。

いろんな想い出の中で今でも鮮明に覚えているのは四年生から六年生までの臨海学校で美浜の久々子の海に行ったことです。

上中駅に全員集合して汽車に乗って美浜駅に、美浜の駅から久々子まで歩いて三十分とても今では考えられないことです。それも二泊三日分の重い荷物を持ってたいへん暑い中を歩くのです。民宿の名前は「しばこ」と呼び、私は三年間お世話になりました。

海での水泳の研修はたいへんおもしろく、実際、私もこの海で始めて泳げるようになりました。

一日のスケジュールは、

朝六時十五分起床
六時三十分ラジオ体操
七時～　朝食
八時～　宿題
九時～　水泳
十二時　昼食、昼寝
十四時～　水泳
十六時～　散歩、自由時間
十七時～　風呂、夕食
二十時～　きもだめし
二十一時～　就寝

となっており、なかなかハードなスケジュールでした。中でも二十一時に就寝となっていますが、きもだめしの余韻が残っているのと、みんなといっしょにいるという楽しさが加わってなかなか寝ることができませんでした。

最後になりましたが、最近母校野木小学校の児童数が年々減少し、四・五年先には全児童数が六十人程度となり上中町で一番少ない学校になると聞いております。たいへんさびしいかぎりです。今後、野木小学校発展のために何かできることがあればと、今思っております。

京都からの近況報告

第59回卒（昭和43年）
京都市　能世英之

たしか小学校の卒業文集だったと思うが、将来なりたい職業として「電気技師」をあげていたと記憶している。子供の頃は技術系が好きでそんな夢を抱いていたと思うが、人生なかなか思うようには行かず、就職難という事もあって、それまで考えた事もなかった国鉄に入る事になった。

就職はしたものの当時の国鉄は親方日の丸、労働の意欲もそがれてしまうような末期的で硬直した職場であった。

敦賀機関区で七年間勤務し電気機関士にはなったが、その後の国鉄改革のあおりで新幹線総局・大阪第二運転所へ転勤となった。地元を離れての勤務なのでかなり悩んだが、若いうちに何事も経験しておこうと前向きに考える事にした。

初乗務は288A、最終の〝ひかり〟で当時最も足の速い列車であった。冬の夜で雪が前面ガラスに吹き付け前は全く見えない状況の中、不安と緊張を打ち消し信号通り220KM突っ走った事が昨日の事のように思い出される。その後

民営分割化によりＪＲとなり、学生時代に帰省等でよく利用した東海道新幹線に乗務する事になった。かつて見慣れた風景も運転台から見るととても新鮮に映って見え、感慨深いものがあった。約五年間の乗務で、幸いにも運転事故やミスは起こさずにすんだが人身事故に二度遭遇した。運転士二人乗務時代でどちらもハンドル担当ではなかったが、こればかりはあまり有り難くない経験であった。平成七年の阪神淡路大震災の時は、京都に移り住んでいて、当時は運転計画担当として内勤に下りていたが、地震発生後非常呼び出しがかかり私鉄とタクシーで何とか出社、以来数日間、大混乱の中をほとんど不眠不休で業務にあたる事となった。これは二度と出来ないような貴重な体験となった。

早いもので大阪へ出て丸十年が経過した。長男として田畑の守もしなくてはならず、できれば実家から通いたいと思っているので、一刻も早い若狭リゾートラインの完成を首を長くして待っている今日この頃である。

小学校時代の思い出

第41回卒（昭和25年）
武生　福田成明

小生は昭和十九年に野木小学校に入学しました。入学の頃は戦争中で有りましたのでその当時のことを思い出して面白く書いてみたいと思います。その頃は皆が勉強にも、遊びも大変意欲的で有りましたが、今回は特に遊びを中心に書いてみたいと思います。

その頃は戦時中で有り戦状も日一日と悪化していて本土爆撃も日増しに激しく成っていました。

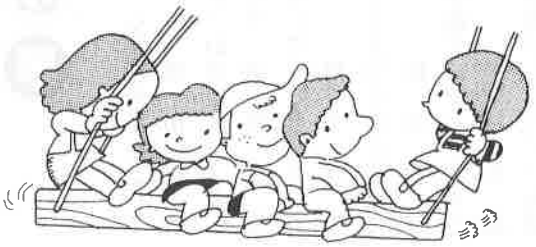
ある日のこと、舞鶴海兵団への陸上補給路で有る小浜線での軍需物資の輸送をカットする為に米軍の航空母艦より発進した艦載機、グラマン戦闘機の編隊の飛来で有る、超低空で飛来するグラマンのパイロットの顔がはっきりと確認出来る近さである。我々子供仲間で「グラマンが来たど一石投げて落してやろうか」、「そうや、よっしゃ、よっしゃ、やったろうか」と投石を続ける有様。すると同時に後続機による機銃掃射の雨、水の溜った水田に「バリ、バリ、バリ・・・・」と弾丸の雨、しかしながら恐れを知らない我々腕白小僧、盛んに投石を続ける有様であった。かたや小浜線方面では軍需物資を積載した貨物列車の機関車に向かって、グラマンの急降下爆撃である。赤い火種を上げて機銃掃射が続き、ついに機関車はストップしてしまったので有る。戦争状態は益々悪化するばかり。ついに長崎、広島に原爆投下。その時二年生、昭和二十年八月、終戦と成ったので有ります。戦後は物資がなくそれはひどい耐乏生活を強いられて来たので有る。しかし、我々の故郷は豊かな田畑が有り全国的な食料不足とは反対に食べることには心配なかったのです。

小学校時代に強く印象に残るのは、福田善正先生であります。先生は勉学はもとより教練にも意欲的だったと思います。授業が始まる前に教室に入る時には必ず教育棒を持って入室。教育棒とは木製のナギナタを改良したものです。授業中に悪ふざけでもすれば、すぐさま教育棒が頭上、肩とに落下、私達にすれば正に教育棒なので有った。

先生の胸中には、生徒間の勉強に対する意欲高揚の為、テストの問題が出来れば教室を出て遊んでも良い、と云われ一生懸命、頑張ったものです。だから遊ぶ時は、思いきり遊んだものです。例えばビー玉、釘刺し、ケンパ、メンコ、地面取・・・等々、いろいろな遊びが有りました。釘刺で取った釘を、ポケットに重い程入れる、又メンコ取りをして勝ったメンコの大判、小判を服、ズボンのポケットに一杯入れて教室に入るのである。しかし、先生の教育棒はそれを見逃さない。ある日のこと「お前ら、一寸と教員室へ来い」と云われ教員室に呼び出される。暖房用の大きな火鉢の前に数人の生徒が立たされ、ポケットに入った全てのメンコを少しずつ火鉢に入れられる。するとメンコが赤々と燃える。その様子を見て「お前ら、暖いやろ。」そして又、「この炎の様に勉強でもスポーツでも遊びにしても、良いこと、悪いことをわきまえて、情熱を燃やすんだぞ。」と云われた事が、小学校時代の思い出として脳裏に残っているので有る。

さて小生昭和十二年生れ、生れてこの方六十年、人生の中で五里霧中、迷った事等、何度かありますが、これからの人生は、人間万事塞翁が馬、人生ままならぬ、の一言に尽きると思います。

最後に成りましたが、野木小学校同窓会員の皆様方の益々の御活躍をお祈りしています。これから野木の里を担う若き後輩を育て上げようでは有りませんか。



幼き日の思い出

第32回卒（昭和16年）
下関市　橋本忠夫

同窓会のみなさんにはご健勝にてご活躍の事と存じます。毎回会報を送っていただき懐しい思いで拝見させてもらっております。役員の方々のご苦労ご配慮心より感謝致しております。紙面をお借りしお礼申し上げます。さて私昭和11年入学同16年卒業（32回）生です。現在山口県下関市に住んで居り、故郷野木に帰る事は3年か5年に一度、それも冠婚葬祭の時ぐらいになってしまいました。昨日の出来事もど忘れして思い出せない今日この頃なのに、不思議と野木の山々、鉄道線路と野木の間を流れる北川、そして田に這入る小さな小川、瞼をとじれば同級生一人一人が浮かんでくるのです。一年生の担任は奥本先生（女）でした。入学して間もない頃でした。先生が忠夫さんと名前を呼ばれ、ハイと返事をすると、もう一人横の方からハイと返事をする男が居り、アレッと思いました。又呼ばれたので今度は負けたらいかんと思い、前より大きな声でハイと返事をしたら、やっぱり又横の方でハイハイと返事をする男が居り、後でこの男が東忠男君で自分は橋本、二人の忠夫で、一年生になったとたんライバルが現われたのですが、これがどうした事か一番の仲良しとなり、北川へアユ釣りや冬山へスキーですべりに行ったりと、二人一緒に遊んだ日の多かった事を思い出します。近所のおばさんから、お前ら二人は（鍋摑み）みたいやなあと笑われていました。鍋摑みとは藁で鍋の両端を摑める様に作ってあり、それを左右を縄で継いだものです。仲の良い友達は、一人だけでは有りません。クラスのみんなが男も女も仲良しで体操の時間のドッチボールやバレーボール、休み時間の馬飛びに縄飛び、又修学旅行の伊勢神宮参拝等々懐しい思い出が次から次にと浮かんできて止まる事が有りません。何年振りかに一度野木に帰る時はいつも同級生に逢いたくて、誰かに電話するとほとんどの人が集まって元気な顔を見せてくれて、昔話に花が咲き、この時が一番嬉しいひと時です。今年の4月、敦賀で水産学校の同窓会が有り行った時の事、急に同級生に逢いたくなり電話したら、お前この忙しい時に何云うとるか、集まらへんど。と相変らずズケズケと例の仲良男の電話の声。でもみんなに声掛けてみるからしばらく待てとの事。そして夜迄仕事せんのやから二、三時間でも逢おうと十数人集ってくれました。元気な顔を見て涙が出る程嬉しかった。みんないつ迄も元気で又逢おうねと別れました。遠く離れていても野木そして同窓生、これより優る何もないとつくづく感じています。故郷我が心の故郷。末筆乍ら、皆様のご健勝ご多幸をお祈り致します。

六年生　将来の夢

○若狭高校に入って、野球部に入り、気比高校をたおして、甲子園にいきたいです。　奥田章智

○百メートルの選手になりたいです。わけは、百メートルの選手にあこがれているからです。武倉正樹

○エリート会社に入ってもっとかせいで、貯金して、でかい家といい車を買いたいです。　橋本武裕

○ごくふつうの会社につとめる。ごくふつうの会社員になりたい。　田辺貴章

○ぼくは、野球選手になって有名な選手になって、すごい記録をつくりたいです。　中村浩哉

○プロバスケットの選手かプロ野球選手になって、優勝をめざしたいです。　勝木佑一

○有名な画家になって十兆円もうけて、すごいことをしたいなあ。　山田真

○ぼくは、ペットショップの店長になって、いろいろな動物をしいれたいです。　東幸亮

○将来は、長生きして有名になってテレビとかにでてみたい。　居関卓実

○ぼくは、将来、科学が発達していたら、宇宙旅行をしてみたい。　上田裕士

○大リーグへいきたい。大リーグでたくさんの記録をつくりたい。　武田直紀

○貯金をためて油田を買って、もうけたい　倉谷幸英

○わたしの将来の夢は、じゅう医です。いつかアフリカに行って動物たちを助けたいです。　小梶和美

○りっぱな看護婦さんになって、病人の人を病気から救ってあげたい。　内藤香里

家庭の日入賞児童作文

銅賞

たまごあつめ

一年　ないとう　ななえ

わたしのおとうさんとおかあさんは、にわとりのひよこをそだてるしごとをしています。それから、はなしがいのたまごのはんばいもしています。

がっこうのあるひはてつだえないので、なつやすみは、おねえちゃんとおにいちゃんとわたしも、しごとをてつだいました。ばけつをもってたまごあつめをします。

おなかのしたにたまごをいっぱいかくしているにわとりもいるし、てをいれると、つっついたり、かみついたりするこわいにわとりもいます。でも、わたしのあとをついてくるひとなつっこいかわいいにわとりもいます。わたしがはなのさんだるをはいていたので、はなをいしょうけんめいつっついているにわとりもいました。

にわとりのおなかのしたのたまごをとろうとしたら、

「うっっ。」

とこえをあげて、はねをひろげておこっていました。

「がんばってうんだのに、もっていかないで。」

と、いっているのかな。

たまごをあつめていると、めのまえでたまごがうまれました。たまごがおしりから、みえたりかくれたりして、ぽんと、うまれました。わたしは、うまれたてのほっかほかのたまごをとって、にわとりさんに、

「ごくろうさん。」

と、いってあげました。

たまごでいっぱいになったばけつをみて、おかあさんが、

「ありがとう。おおだすかりやわ。」

といいました。おとうさんも、

「ごくろうさん。」

といいました。

わたしは、おおあせをかいてつかれたけど、てつだってよかったとおもいました。

○小さな子に好かれるようなやさしい保母さんになりたいです。　森　紘乃

○わたしの夢は、世界でも有名になれるようなスーパーモデルです。　森　真奈美

○やさしく、明るく、みんなに好かれるような保母さんになりたいです。　森井真貴

○わたしの将来の夢は、保母さんになって、たくさんの子供と仲よくすることです。　奥本浩恵

○獣医さんになって、いろんな動物の病気やけがを治してあげたいです。　奥本理恵子

○有名な美容師になって、家庭も仕事も両立して、近所でも評判のいい奥さんになりたいです　塚本珠代

○わたしは花が好きなので、花屋さんになりたいです。　居関麻美

○将来すてきなお母さんになりたいです。子供といっしょに楽しく暮らしたいです。　倉谷友季

金賞

いねかり

二年　かわら　けんた

八月二十五日、あしたはコンバインで、ハナエチゼンのいねかりです。おとうさんとじいちゃんで、おしごとを休んで、いねかりをします。

きょうの夕方に、いねかりがまで、四つのすみをかりました。かった人は、ぼくと、たっちゃんと、ばあちゃんです。ザクザクと、はぎれのよい音がしてかりすすんでいきました。かまでゆびをきるといたいので、左手を上に上げて、いねをしっかりもってかりました。ぼくは、二かぶで手がいっぱいになっていたのにたっちゃんは四かぶももったから、ゆびをきりました。いねのながさは、六十㎝ぐらいです。かっていると、ばあちゃんが、

「すごいなあ。」

と言ってくれました。ばあちゃんは、一気に六かぶもかりました。たっちゃんは、ゆびをきったので、さいごまでしませんでした。ぼくとたっちゃんは、のこぎりのように、こすらなければきれなかったけど、ばあちゃんは、一回できれたから、すごいなあと思いました。

つぎは、二つ目のすみです。ばあちゃんはまい年一人でしていて、二時間もかかってしているのに、今年は、ぼくとたっちゃんがてつだったので、一時間三十分でできました。ぼくは、たっちゃんがゆびをきったので、ばあちゃんといっしょに、たっちゃんの分までがんばってかりました。

つぎは三つ目のすみです。ぼくは、

「もうちょっとや。」

と言いました。ばあちゃんが、

「あきれたわ、見直したわ。」

と言ってくれました。うれしかったです。

全部でぼくは百かぶ、ばあちゃんは五百かぶはかったと思います。楽しかったので、またらい年やりたいなあと思いました。

三㎡かくぐらいのすみを、四つかるのに二人で一時間三十分もかかったのに、二十六日にはコンバインで、ながさ百m、はばが四十mの大きさの田んぼを三時間あまりでかりおわってしまいました。きかいの力ってすごいなあと思いました。

ぼくは、田んぼのしごとってつらいなあと思ったけど、いっしょうけんめいおてつだいして、ばあちゃんによろこんでもらい、おかあさんにはほめてもらえて、その日の夕ごはんはとてもおいしかったです。

若狭テクノバレーのご紹介

若狭テクノバレー（若狭中核工業団地）は、地域振興整備公団と福井県及び上中町が共同で事業を進めている工業団地です。堤地籍の総面積六十三ヘクタールの広大な敷地に、緑地及び公園が十八ヘクタール設けられています。また、使いやすく機能的な区画割りを施すなど、快適な環境が重視されています。

平成三年十一月に日本電気硝子が最初の企業として操業以来、各社の進出が図られ、順次操業を開始しています。現在次のような企業が進出しています。

日本電気ガラス（液晶表示用薄板ガラス製造）	282名
おたべ（菓子製造・販売）	30名
光洋（医療・看護用品製造）	21名
松井金網工業（金網製造）	10名
ダイセン（家具製造）	22名
ミヤギ（機械装置製造）	8名
木村機械建設工業（機械装置製造）	30名
セントラルガス（LPガス製造）	10名
大阪プラント（トナーカートリッジリサイクル製造）	50名
三和セラミックホーム（木造住宅施工販売）	50名

銅賞

子もり

五年　清水美緒

私は、みんなが休みの日曜日は、とてもいそがしいです。なぜなら、お父さんやお母さんも会社は休みだけど、妹の里奈ちゃんも休みだからです。

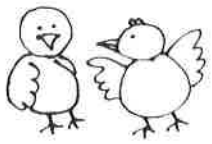
お父さんは、日曜日でもけっこうようじがあって、出かけて家にいないことが多いのですが、家にいるときは、家の仕事がまっているからです。先日は、屋根にひいてある鉄板に穴があいていたので、お母さんといっしょに屋根に登り、かわらを取り、大工のおじさんに鉄板をひいてもらってから、また、かわらをひきました。みごとに雨もりは直りました。

お母さんは、そうじ、せんたくでバタバタしています。そしていつもは、里奈ちゃんと遊んでくれるおばあちゃんも、朝から畑仕事でいそがしいので、里奈ちゃんは私と遊ぶしかありません。里奈もよく知っていて、「おねえちゃん遊ぼう。」と来ます。だから私は、いつも里奈ちゃんの子もりをしなくてはいけないのです。里奈ちゃんがごきげんにしていると静かだけど、泣き出すとわたしでもとめられません。だから私は里奈ちゃんが泣かないように気をつけて、人形遊びやままごとをしてごきげんをとっています。もし、ごきげんでなくなってしまったときは、自転車に乗って遊んだり、「めずらしい物があるよ。」といって気をそらせて泣きやましたりいろいろなことを考えるのが大変です。

そして大ちゃんと里奈ちゃんがけんかをすると、仲直りをさせるのが、さらに大変なのです。里奈ちゃんは女の子なのにけっこう強く、お兄ちゃんの大ちゃんに負けません。けっきょく大ちゃんも里奈ちゃんにかなわないのです。そんな里奈ちゃんですが、かわいい私の妹で、今日はいっしょにホットケーキを作りました。「私がかきまぜるから、里奈ちゃんは牛乳と卵をかきまぜたのを入れてね。」と言うと「うん、わかったよ。」と言いました。こげているのもあったけど、ここで里奈ちゃんは、すごくごきげんでした。そしてホットケーキはおいしかったです。

里奈ちゃんの子もりは大変だけど、里奈ちゃんがねていたりすると、なぜかさみしくて、ついつい里奈ちゃんのほっぺたを「ちょんちょん。」とつついたりしてしまいます。

家族って、みんながそろうことで、それぞれが元気が出るし、あかるくなるのかなと思います。そしてそのわの中で、それぞれの仕事をしながら、みんな協力することで私の家がなりたっているんだなと思います。私も家族の一人として、私のたちばを考えて、これからもいろいろと家の仕事を手伝っていきたいと思います。



銅賞

うちのお父さん

五年　橋本武裕

会社から帰って来るなり、「サイクリングに行くぞ。」「キャッチボールするぞ。」などと言って、遊んでくれると言うか、遊んであげるって言うか、いっしょうけんめいにやっています。すごく楽しそうです。

お父さんって言うより、友達っていう感じです。お母さんはいつも言っています。「子供が三人いるみたいやなぁ。」って。ぼくも、そう思う事もあります。ぼくたちにすぐちょっかいを出して、ぼくや弟をおこらしたり、泣いてしまったりするので、おばあちゃんにおこられたりします。お父さんもおばあちゃんには弱いんだなぁと思いました。

夜には、最近おなかが出て来たから、「トレーニングするぞ。」と言ってぼくたちをさそいます。そのときぼくはいつもねたふりをします。でもこうかはあまりありません。おなかが出ているのは、お父さんだけなのになんでぼくたちまでやらなくちゃならないのだろと考えます。でもやっぱり行ってしまいます。

お父さんの仕事はクレーンの運転手です。今は五十トンぐらいのクレーンに乗っているそうです。車でお出かけすると、自分が行っていた所に建っていると「これは、お父さんが建てたんやで。」ってじまんげに言います。でも本当は大工さんが建てたやろうとぼくは思います。他にも病院とか、ホテルとかが建っていると、同じようなことを言って、とてもうれしそうに、話してくれます。本当は、クレーンとかで鉄骨なんかを運んだだけなのに、すごい建物が建っているとうれしいんだなあと思いました。ぼくもう

れしくなってしまいます。こんな楽しいお父さんでも、おこるとやっぱりこわいけれど、ぼくたちのことをとっても心配してくれて、遊んでくれてすごくいいお父さんです。大好きです。

何でも話せるし、友達みたいなお父さんです。いつまでもいてほしいです。

寄稿募集

本会の会報も十一号を数えることになりました。例年では事務局から会員の皆様に原稿をお願いして紙面を作っていますが、皆様よりの寄稿をいただけますと大変ありがたいと思います。近況報告・思い出話など内容は自由で結構ですのでよろしくお願いいたします。

児童読書感想文

辻君への手紙

二年　奥本理恵子

辻君、私はこの本を読んで辻君のことが大好きになりました。それで、辻君に手紙を書くことにします。

辻君は、からだが不自由だけれども、作文が得意で、小さな親切作文コンクールで入選しましたね。あなたは本当にやさしく、だれからも好かれる男の子だと思います。あれはたしか三学期のことです。四月から入学してくる新一年生のためのしゅう学時健康しんだんがありましたね。耳、目の検査が終わると、辻君は、かわいい女の子の手を引いて階段を上ったり下りたりと、それはやさしくその子をかばっていました。そんな時、辻君はやさしいなあと思うのです。

ところで、辻君は、習字のたびにすみをこぼし、消しゴムを落としたときも拾いませんでしたね。そんな時大沢先生は「自分でこぼした物は自分でふくのです」と、辻君に一時間もかけてふかせました。私は、それを見ていて「辻君がかわいそう。きびしい先生だなあ」と思いました。しかし、その後「先生は辻君のしょう来のためにきびしく注意しています。でも、あなた方は友達として今までと同じように親切にしてください」と大沢先生はおっしゃいました。その言葉を聞いて私は、本当の親切は何もかもやってあげることではなく、辻君ができることは自分でさせてあげるということなのだと初めて気がつきました。

私は、今年の夏休みに白山に登りました。登るときは、とてもつらくて何度も何度もやめたいと思ったものです。でも、辻君が歩き遠足で四キロも歩き通したことを知り、少しはずかしくなりました。健康な私は、もっともっとがんばらなくてはという気持ちでいっぱいです。辻君、私に勇気をあたえてくれてどうもありがとう。

また、運動会の時には辻君は百メートルを歩きましたね。どんなにおそくても辻君は歩ききったのです。お年寄りの方、父母の間から拍手が起こりました。でも、その拍手はかえって辻君の心を傷つけることになるのです。実は私はマラソンが苦手です。それはビリになって拍手されるのがいやだからです。だから、辻君の気持ちが痛いほどよく分かります。

いよいよ卒業式。五年生のハーモニカ演奏の高鳴る中、胸に赤いカーネーションをつけて、辻君は式場へと入場してきました。なみだがあふれていましたね。「辻よしのぶ」と呼ばれ先生にうでを持ってもらいながら階段を上りしっかりと卒業証書を受け取った姿が目に焼き付いています。大沢先生も泣いておられました。

この六年間つらいこともたくさんあったことでしょう。これからもきっとつらいこと、悲しいことは多いと思います。でも、その分うれしいこと楽しいこともいっぱいできると思います。私もあと半年で卒業です。辻君に負けないようなすばらしい卒業の日がむかえられるように努力します。辻君、見ていてくださいね。

編集後記

同窓会会報十一号をお届けいたします。本年度も事務局の異動があり、編集委員の皆様にご迷惑をおかけしながら、やっと会報の発行にまで至ることができました。ご多用の中原稿の依頼を快く引き受けていただきました皆様、本当にありがとうございました。皆様よりの原稿を拝読し、遠く離れた地よりの故郷への思い、同窓生の皆様への思いに胸が熱くなるのを感じました。この会報が同窓会の皆様のお心をお届け出来ますことに事務局としても喜びを感じております。ありがとうございました。